

1964年以来56年ぶりとなる東京でのオリンピック・パラリンピック開催が来年に迫ってきました。「選ばれる都市」を目指している東京だけでなく、世界に対しても日本をアピールする機会となる大会への期待や成功に向けて旅行業界が果たすべき役割などについて、東京都の小池百合子知事とJATAの田川博己会長に語り合つていただきました。

## ・パラリンピックに向けて

& 田川博己 JATA会長

# 来への礎を築く



小池百合子 東京都知事

## 「暮らしぶりも都市の魅力としてアピール」

今年は、ラグビーワールドカップが開催されますが、オリンピック・パラリンピックの東京大会が開催される2020年も含めて、

「心のバリアフリー」を目指して  
——1964年東京大会では、戦後復興を成し遂げた高度成長期の日本を世界に示すという歴史的・社会的な意義も大きかつたわけですが、2020年東京大会については、ソーシャル・アспектも含めて、その意義をどのようにお考えになりますか。



2020年東京大会の成功に向けて熱く語り合う田川会長（左）と小池知事

——新年おめでとうございます。2020年オリ・ピック・パラリンピック東京大会まで1年余りという2019年の年初に当たり、大会への期待をお聞かせください。

小池 東京都を訪れる外国人旅行者数は、2017年は1370万人を記録して、都の人口とほぼ同じ規模まで成長しました。さらに、東京大会が開催される2020年には、2500万人という大変に野心的な目標を掲げています。オリンピック・パラ

リンピックというメガイベントをフルに活用して、その目標を達成できると期待しているところです。特に、私は、パラリンピックに力を入れたいと考えており、東京も日本全体も超高齢社会が視野に入ってきており、東京に住む人にとっても、東京へ訪れる人にとっても、そして、高齢者の方でも、障がいのある方でも、訪ねやすい、楽しみやすい、そして、住みやすい東京にしていきたいと考えています。都は『Tokyo Tokyo Old meets New』とスローガンを作成しましたが、東京にもともとある魅力をさらに磨いて

田川 知事がおつしやられた「訪ねやすい」「楽しみやすい」という都市としての「やさしさ」は、非常に大切なことだと思します。観光の発展を振り返っても、都市に「楽しさ」と「やさしさ」が加わると、世界的な観光地になれるというのは、歴史が証明するところです。ケーブルタン男爵は、文化とスポーツの両面からオリンピックの重要性を訴えたわけですけれども、旅行業界に身を置く人間として、知事がお話をされたパラリンピックと文化という部分について、かなり意図的に取り組んでいかなければならぬと考えています。

世界的なスポーツのメガイベントが続くチャンスはめったにありませんから、その部分で力を発揮させていただければと期待しています。

て観光資源の多様化も進め、世界にどんどん発信していくたい。また、東日本大震災を乗り越えて、日本が甦っているという点も、世界への感謝を込めながら発信したいと思っています。そのためにも、旅行業界や観光業界の皆さんと連携を図つていくことが重要と考えていますので、よろしくお願ひいたします。

# 謹賀新年

2020年東京オリンピック

## 小池百合子 東京都知事 “共同作業”で未



**小池** 前回大会では、一般的に、新幹線や高速道路など社会インフラの整備がレガシーとして残され、それらは現在も、文字通りのレガシーとして社会を支えています。2020年東京大会では、ハード面でバリアフリーを徹底することを残すべきレガシーのひとつと考えています。同時に「心のバリアフリー」でも、多様な人々を受け入れる懷の深さ、いわゆるダイバーシティへの意識を高めることも、2020年のレガシーとしていきたい。また、渋谷のスクランブル交差点が外国人旅行者の観光スポットとなっているように、私たちには日常生活での当たり前の行動も東京の魅力に数えられる時代です。町中にはとんどのゴミ箱がなくても通りが美しく保たれているのも、都民の皆さんのが美しく保たれているのも、都民の皆さんのが心がけによるものですが、プラスアルファの

作用で日本ファンや東京ファンを増やしていくのではないかと思います。そうした暮らしぶりを都市の魅力としてアピールする」ともレガシーになりうると考えています。

### 業界と連携し将来への礎を

——2021年以降における持続可能なツーリズムの発展に向けて、旅行業界への期待をお聞かせいただけますか。

**田川** 知事がおつしやられた日本人の持つ清潔感は、我々自身あまり魅力として気付いていない部分かもしれませんし、今までは外に向けてアピールすることなど考えられていません。昔は町内で打ち水をしたり、江戸時代には落ちているゴミを着物のたもとに入れたりなど、ことが当たり前に行われていました。清潔感だけに限らず、長い歴史の中で受け継がれてきた「日本の心」を魅力としてアピールする方で、「心のバリアフリー」については工程表に従つて段階

田川博己 JATA会長

「2020年東京大会は“千載一遇のチャンス”」

**小池** 先日、ロンドンとパリを訪問してきました。ロンドンは2012年大会を大成功させ、パリは東京からのバトンを受け取り、2024年大会を開催する都市です。ロンドン大会の大成功をもたらしたのは、パリオリンピックへの関心を高められたことです。大会が終了した2013年以後も、英国を訪れる旅行者は増え続け、同国の経済にも恩恵をもたらしています。明確なコンセプトを持ち、着実にプランとして実行し、ハードとソフトが相乗効果を生み出したロンド

ンバーシティの考え方を、ツーリズム産業や旅行業界が広めていく努力もしなければなりません。「心のバリアフリー」の発露として「やさしさ」や「楽しさ」が体現されると、東京に対する国際的な評価もさらに高まっていく。業界としてそんな風に考えられるようになれば、それも一つの大きなレガシーと言えると思います。

**田川** 2020年東京大会は、旅行業界にとってもツーリズム産業にとても、千載一遇のチャンスです。1964年当時の新幹線や高速道路とは異なり、2020年の「楽しさ」「やさしさ」という目に見えるいレガシーですが、次の時代へ繋げていくための大切な要素です。旅行業界としても、その視点はしっかりと持ちたい。国として4000万人、東京都として2500万人という大きな外国人旅行者数の目標実現に向けては、国際的なレベルで考えていかなければなりません。JATAも主催団体のひとつであるツーリズムEXPOジャパンは今年、大阪関西で開催されることになりますが、こういったイベントも日本を世界に発信していく上では非常に大切で、東京に戻ってくる2021年以降に向けて今年を節目の年にしたいと考えていますので、期待いただければと思います。